

contents

LGBTsを対象にした全国インターネット調査

2019の結果から……………1

北東北性教育研修セミナー2021冬・報告……………9

いつきの“ヒューマン・ピーイング”②……………12

多様な性のゆくえ④……………13

性教育の現場を訪ねて④……………14

今月のブックガイド……………16

JASEインフォメーション……………17

LGBTs を対象にした
全国インターネット調査 2019 の結果から

宝塚大学看護学部教授 日高 庸晴

はじめに

筆者がゲイ・バイセクシュアル男性を対象に実施したわが国初の大規模インターネット調査の実施年は遡ること22年前の夏、1999年のことである。当時はパソコンの値段は今よりも高価であり、インターネット接続料金も30秒ごとに電話代と共に課金される時代であった。インターネット調査黎明期はその実施手法の試行錯誤もあったが、インターネット利用者という明確な偏りがあったと言える。現在においてもWeb空間におけるサンプリングに代表性を担保することは難しく一定のバイアスがあることは否定できないが、20年来継続してきたことでこのサンプリング手法による調査結果をもとにした経年変化のモニタリングや知見の蓄積があると言えるだろう。

1990年代後半から2000年代にかけて、ゲイ・バイセクシュアル男性をはじめとするMSM(Men who

have Sex with Men)におけるHIV感染の急拡大があり、エイズ対策の一環で数多くの行動疫学調査が国内の特に都市部繁華街等で実施され、筆者もインターネットによる横断調査を複数回実施している。REACH Online(REACHとはResearching Epidemiological Agenda for Community Healthの略)と題されたインターネット調査シリーズは、2016年よりその対象をLGBTをはじめとするセクシュアルマイノリティ(LGBTs)全般に拡大し、健康課題や学齢期のライフイベント等それらに関連する心理・社会的要因を明確化する全国インターネット調査として実施している。本稿では2019年に実施した全国インターネット調査の結果の一部を報告する。

調査の方法

インターネット上のセキュリティが確保されたhttps領域のホームページに無記名自記式質問票を掲

示し、回答可能端末はスマートフォン、タブレット、パソコンとした。研究実施の告知と研究参加者のリクルートは、LGBTs が利用するホームページ、マッチングアプリへの広告掲出、SNS 等のパーソナルネットワークを通じた情報伝達によって行った。研究実施期間は 2019 年 9 月 2 日～12 月 1 日であり、ライフネット生命保険株式会社の委託研究として実施した。なお研究の実施にあたって、宝塚大学看護学部研究倫理委員会による研究計画の審査・承認を経て実施した。

基本属性

回収数 11,382 件、有効回収数 10,883 件（海外在住者 114 件含む）、本稿では国内在住者 10,769 件に限定して回答データの集計結果を報告する。平均年齢は 33.4 歳（13 歳～79 歳）であり、居住地域は北海道（3.7%）、東北（4.8%）、関東（東京都を除く）（23.8%）、東京都（26.5%）、北陸信越（3.4%）、東海（愛知県を除く）（3.8%）、愛知県（5.2%）、近畿（大阪府を除く）（7.4%）、大阪府（8.4%）、中四国（5.1%）、九州（福岡県を除く）（3.1%）、福岡県（3.1%）、沖縄県（1.8%）と関東・東京都で半数近くを占めた。性的指向や性自認に基づくセクシュアリティの回答割合は、レズ

ビアン（6.0%）、ゲイ（53.1%）、バイセクシュアル男性（8.9%）、バイセクシュアル女性（3.4%）、トランス女性（1.1%）、トランス男性（1.7%）、MTX（5.6%）、FTX（6.7%）、その他（13.5%）であった。2016 年の前回調査同様に回答者中ゲイ、バイセクシュアル男性の比率が最も高かった。

研究参加者の職業は全体では常勤（正規雇用）が全体の 54.7%であったが、バイセクシュアル男性（62.3%）、ゲイ（61.7%）、MTX（52.8%）、レズビアン（49.4%）、バイセクシュアル女性（43.8%）と続き、トランス女性（38.0%）、FTX（34.1%）が最も低値であった（図 1）。

カミングアウトの状況は、全体の 57.0%が親や職場（学校）のいずれにおいてもカミングアウトしておらず、その割合は 10 代（44.7%）、20 代（51.2%）、30 代（56.2%）、40 代（66.3%）、50 歳以上（71.6%）であり、年齢が高まるほど圧倒的にカミングアウトしていないことが示された。他方で、親のみへのカミングアウト率はどの年齢層にいても 11%前後であったが、職場（学校）のみでのカミングアウトは全体で 16.1%であったが圧倒的に若年層が高率であり、10 代（24.7%）であれば 4 人に 1 人、20 代（20.3%）では 5 人に 1 人であった。また、親と職場（学校）の両方でのカ

図 1 研究参加者の職業

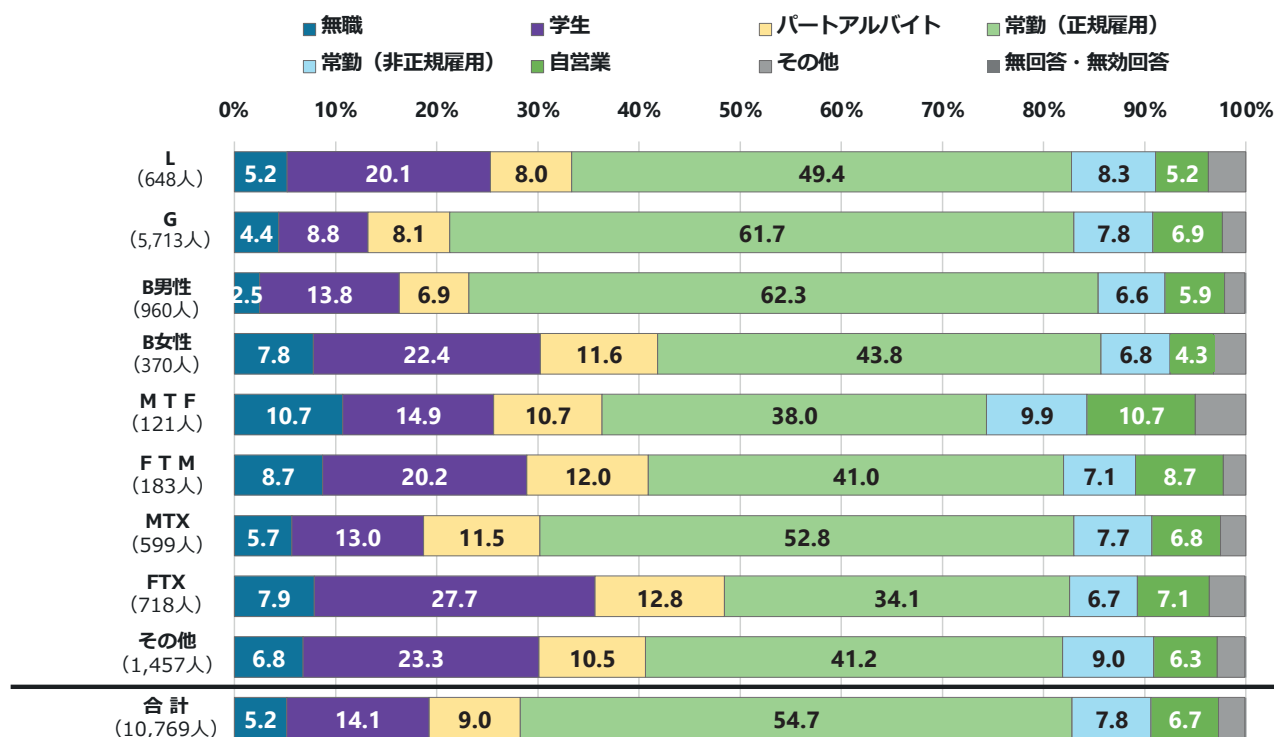
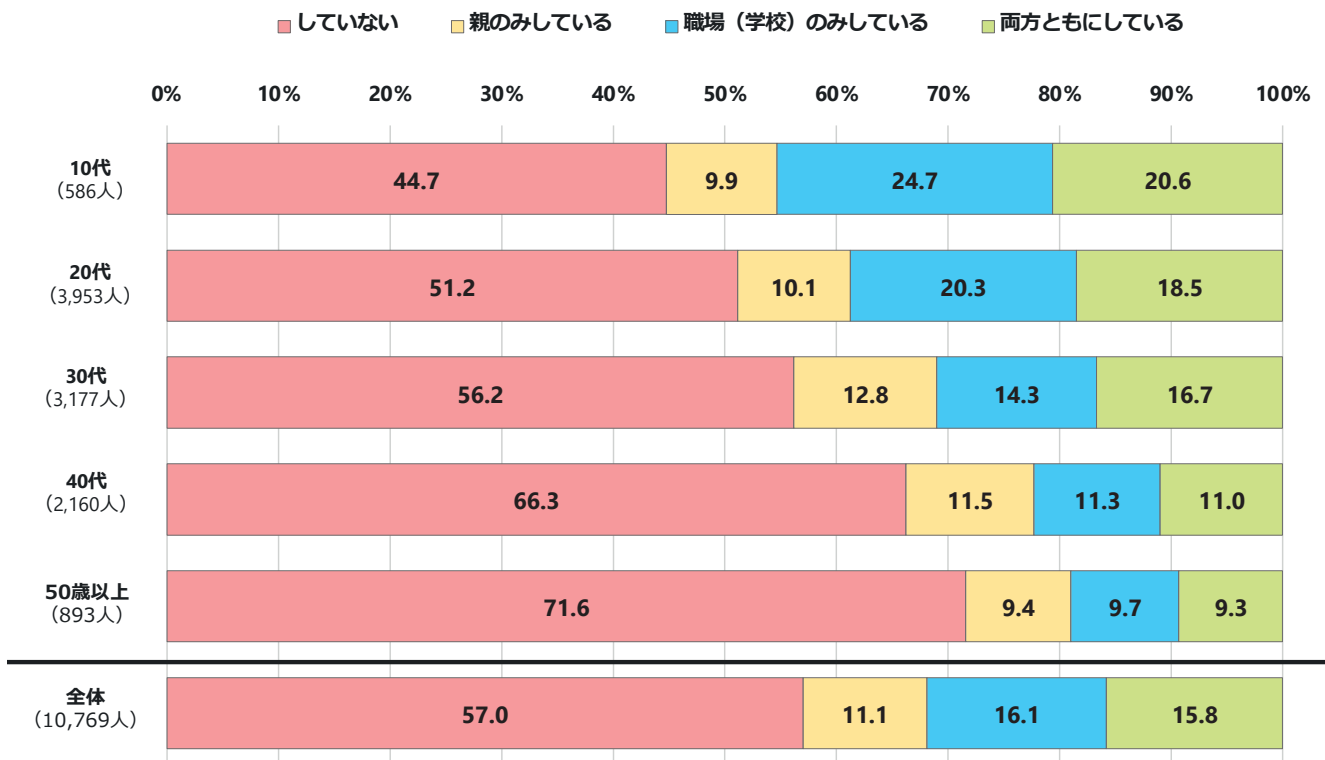


図2 カミングアウトの状況



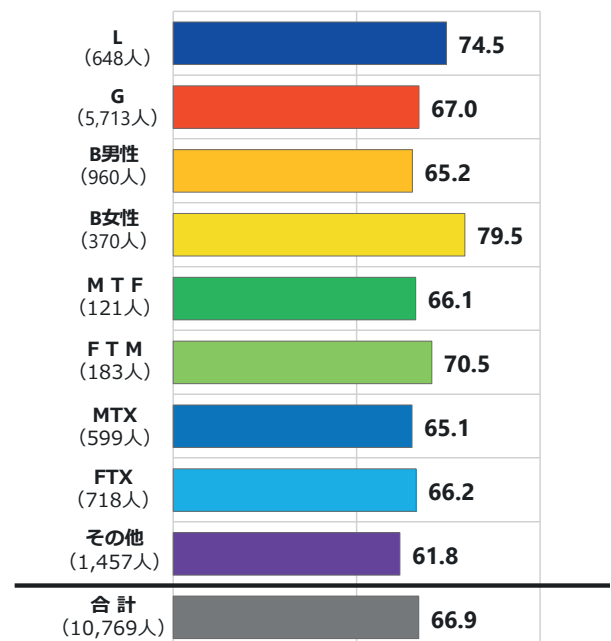
ミングアウト率は若年層に高く 10 代 (20.6%) は 50 歳以上 (9.3%) の 2 倍以上であった (図 2)。

5 年前に比べて社会が変化したかどうか

「5 年前に比べて性的指向と性自認の多様性が尊重される世の中になってきたと思うか」と尋ねたところ、回答者全体で 66.9% がそう思うと回答しており、バイセクシュアル女性 (79.5%)、レズビアン (74.5%)、トランス男性 (70.5%) が最も世の中の変化を感じていることが示された (図 3)。「オリンピックのような国際イベントでは、近年 LGBT に関する取り組みが注目を集めています。こういったイベントを機に社会 (LGBT に関する認識や制度等) が変わる可能性について、どのように感じますか?」と尋ねたところ、全体で 76.4% が良いことだと回答しており、いずれのセクシュアリティや年齢においても 7~8 割以上が同様の回答をしている (次ページ図 4)。

コロナ禍で 2020 東京オリンピック・パラリンピック開催に影響が出ているが、2014 年 12 月にオリンピック憲章が改正され、「オリンピック憲章の定める権利および自由は、人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社

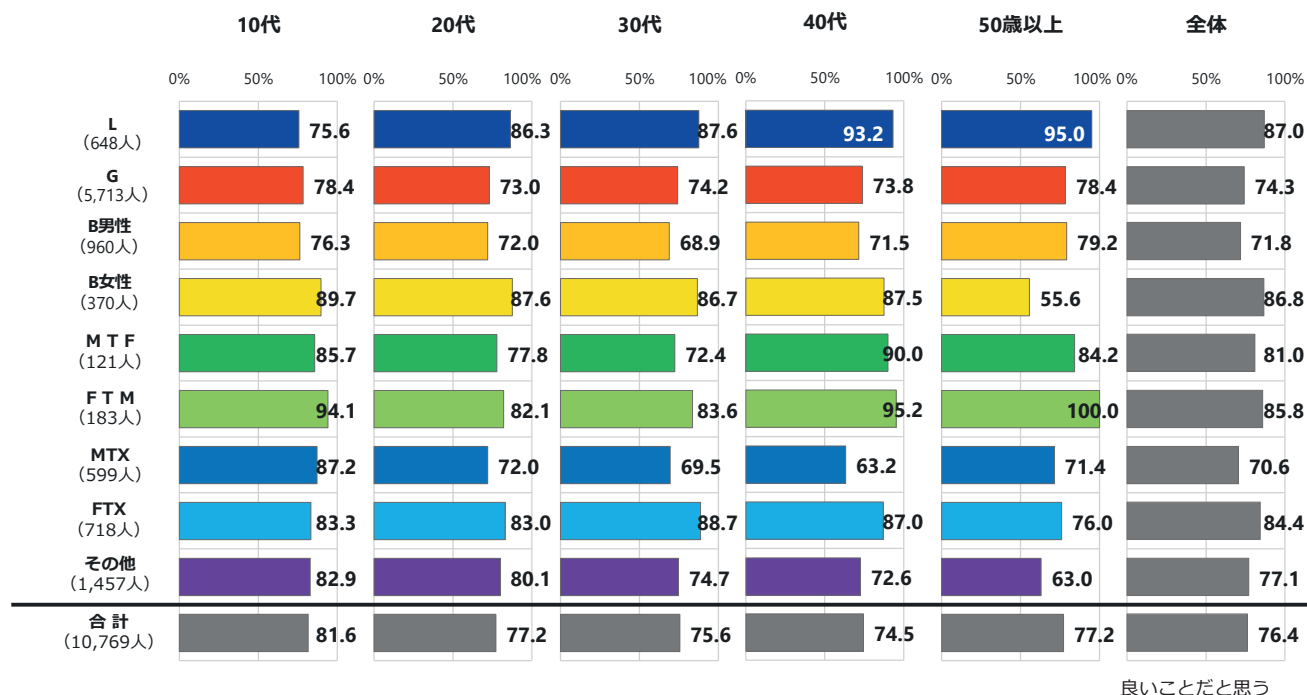
図3 5 年前に比べて社会は変化したかどうか



会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく確実に享受されなければならない」とされた。公的文書に性的指向 (sexual orientation) の文字が追加され、まさに定義がアップデートされた瞬間であった。多様性と調和を謳う東京オリンピック開催の機運にあわせ、国内の多くの大企業が LGBT に関する取り組みをして

図4 オリンピックと社会の変化について

オリンピックのような国際イベントでは近年LGBTに関する取組が注目を集めています。こういったイベントを機に社会（LGBTに関する認識や制度等）が変わる可能性について、どのように感じますか？



おり、その後押しをした要因の一つにオリンピックがあると考えられる。こうした国際的なイベントをきっかけに日本社会が変化することを、多くの当事者が期待しているということだ。

同性パートナーシップ制度のニーズ

親や職場（学校）におけるカミングアウト状況と同性婚やパートナーシップのような、同性カップルの関係を公的に認める制度へのニーズの関連を分析した。異性婚と同じ法律婚（同性婚）を同性間にも適用を望む割合は全体で60.4%であった。カミングアウトとの関連では、誰にもカミングアウトしていない者の同性婚ニーズは全体で53.3%、親のみにしている（67.9%）、職場（学校）のみにしている（65.9%）と続き、親と職場（学校）の両方にしている場合（74.7）が最も高率であった。

また、これらの傾向は若年層ほどより顕著に際立っており10代の約8割が同性婚を望んでいることがわかった（次ページ図5）。札幌・東京・名古屋・大阪・福岡で同性同士の婚姻が認められないでいることは差別的取扱であるとした同性婚訴訟が2019年に提訴されていることは周知のことであろう。裁判の進行が最

も早い札幌裁判において、2021年3月17日に札幌地裁は「同性婚を認めないことは法の下での平等を定めた憲法14条に違反し、その制度がないことは合理的根拠を欠く差別的扱いである」と違憲判決を出している。

いじめ被害経験

筆者がこれまでに厚生労働科学研究の一環で実施してきたゲイ、バイセクシュアル男性を対象にした調査や、LGBTsを対象にした2016年調査から示される当該集団の直面する学齢期のいじめ被害の実態は再現性のあるデータとして度々示されている。国内研究にとどまらず諸外国においても性的指向や性自認、性別表現を理由にしたいじめ被害が後を絶たないことが報告されている。

今回の調査でも全体の59.6%にこれまでの学校生活（小・中・高のいずれか）でのいじめ被害経験があり、とりわけトランス女性に突出してその被害が多かった（次ページ図6）。LGBTsを対象にした2016年調査が示す被害率58.2%とはほぼ同率であり、ゲイ、バイセクシュアル男性を対象にした過去の調査結果と比較してもほぼ6割程度と示されている。また、いじめ被害経験がある者に、「いじめに遭っていることを知って

図5 カミングアウトの状況と同性婚やパートナーシップ制度のニーズ

同性婚やパートナーシップのような同性間の関係を公的に認める制度について、どう思いますか？

- 異性婚と同じ法律婚（同性婚）を同性間にも適用してほしい
■ 国レベルのパートナーシップを制定してほしい
■ 自治体レベルのパートナーシップを制定してほしい
■ 公的制度は必要ないし、つくらないでほしい
■ 公的制度を作る必要はないが、社会の理解は今より浸透してほしい

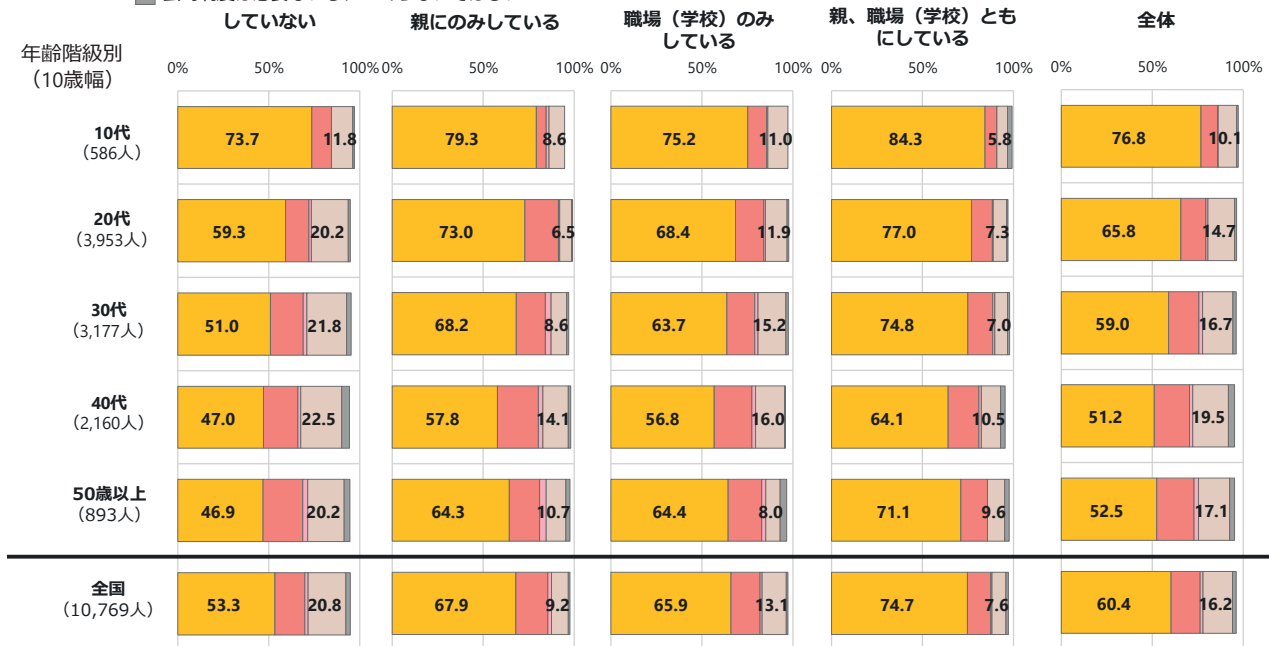
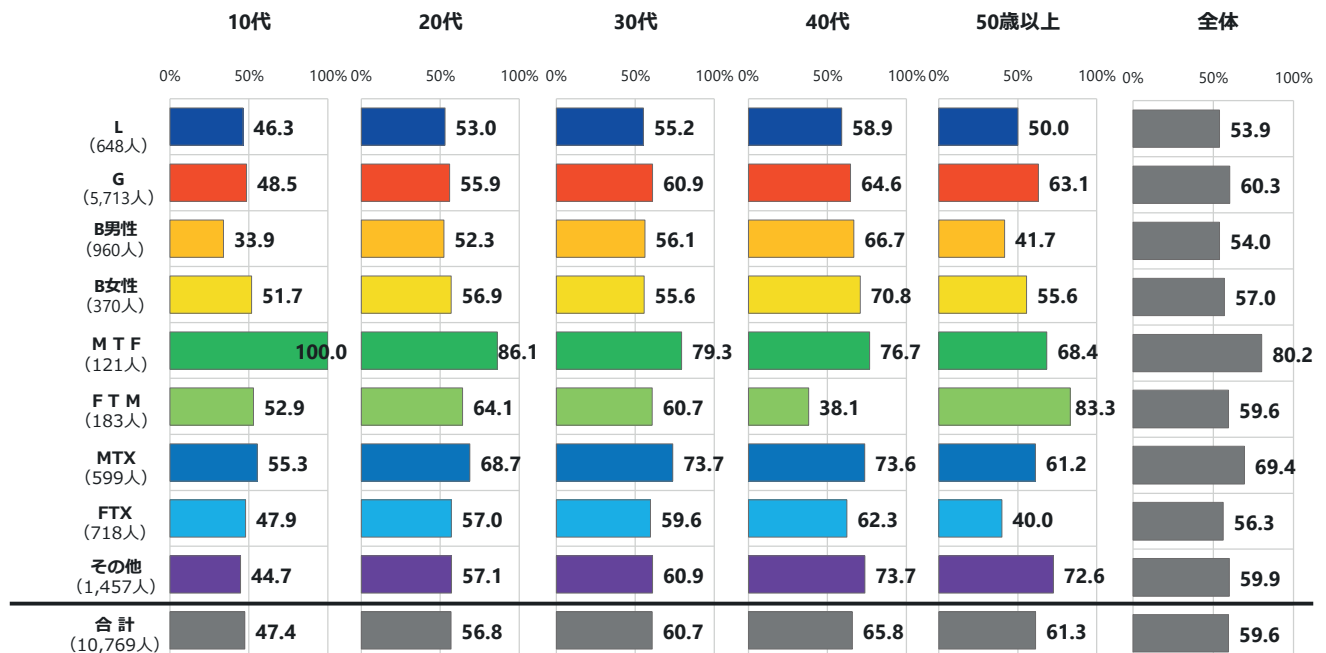


図6 学校生活（小・中・高）におけるいじめ被害経験

これまでの学校生活（小・中・高）で、いじめられたことがありますか？



いる人や目撃者の存在」を尋ねたところ、76.9%がいたと回答する一方、「助けてくれる人やかばってくれる人」がいた割合は36.7%と低率であった。

2017年3月に文部科学省は、いじめ防止対策推進法「いじめの防止等のための基本的な方針」の改訂に

あたり、当該児童生徒へのいじめ防止のため教職員への正しい理解の促進や学校として必要な対応について言及している。いじめを放置しておけば最悪の場合自死につながることもあり、子どもの命を守る取り組みが教育現場に改めて求められている。

制服を着ることの嫌悪経験

これまでの学校生活（小・中・高）で与えられた制服を着ることが嫌だったことがあるか尋ねたところ、全体で9.5%にその経験があったがトランス女性（48.8%）、トランス男性（77.0%）、FTX（49.7%）に学齢期に制服の困難があった。ゲイ（0.8%）、バイセクシュアル男性（1.1%）は制服に対する嫌悪感はほぼないことが示され、レズビアン（14.8%）やバイセクシュアル女性（5.9%）にスカートを与えられることへの嫌悪が少数ではあるが一定程度みられた（図7）。

“LGBTに配慮した制服を導入”といった自治体や制服メーカーの取り組みがマスメディアで報じられることが多くなってきたが、LGBTs全般が制服問題を抱えているのではなく、圧倒的にトランスジェンダーが直面している困難であり、LGBTへの配慮という言葉回しがいかに不適切であるかがわかるであろう。

アウティング被害経験

「セクシュアルマイノリティであることを他人にアウティング（暴露・バラされた）されたこと」を尋

ねたところ、全体で25.1%にその被害があり、セクシュアリティ別ではトランス男性（53.6%）、トランス女性（46.3%）が最も高率であり、次いでレズビアン（34.9%）、MTX（30.1%）、ゲイ（25.5%）が続いた。いずれの年齢層においても平均して25%前後の被害率であるがセクシュアリティごとにその割合に違いがあるので留意を要する（次ページ図8）。

同性愛者であることを同級生にアウティング（暴露）され、大学内の建物の6階から転落死した一橋大学法科大学院生の男性（当時25歳）の存在は記憶にある方も多いただろう。その両親が、同大学に損害賠償を求めた訴訟の控訴審判決が2020年11月にあった。両親の請求は棄却されたものの、判決では「アウティングは、人格権ないしプライバシー権などを著しく侵害する許されない行為」と断言された。

2020年6月に施行されたパワハラ防止法の指針において「労働者の性的指向・性自認や病歴、不妊治療等の機微な個人情報について、当該労働者の了解を得ずに他の労働者へ暴露すること」はパワハラのうち個の侵害になると考えられており、つまりアウティングはパワハラにあたると言及している。いじめと同様に自死につながる可能性もあり、アウティングの危険性について啓発を行うと共に最大級の警告を発しなけれ

図7 制服を着ることの嫌悪経験

これまでの学校生活（小・中・高）で、与えられた制服を着ることがいやだったことがありますか？

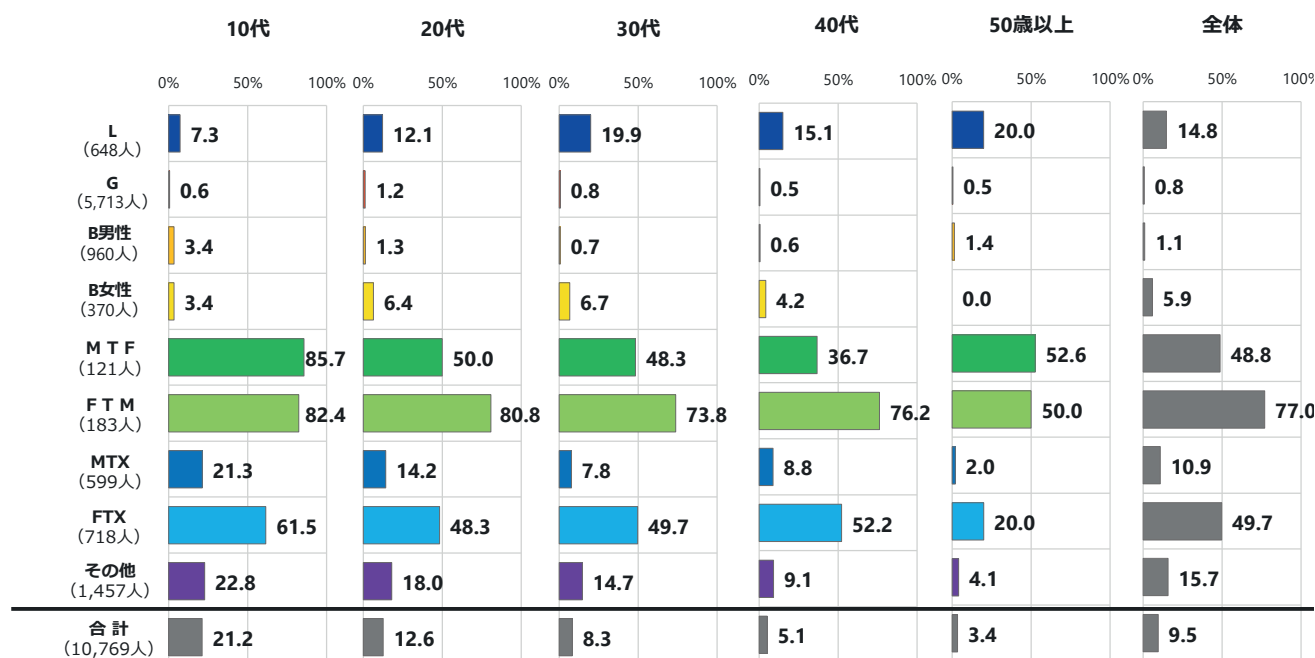


図8 アウティング被害経験

あなたがセクシュアルマイノリティであることを他人にアウティング（暴露・バラされた）されたことがありますか？

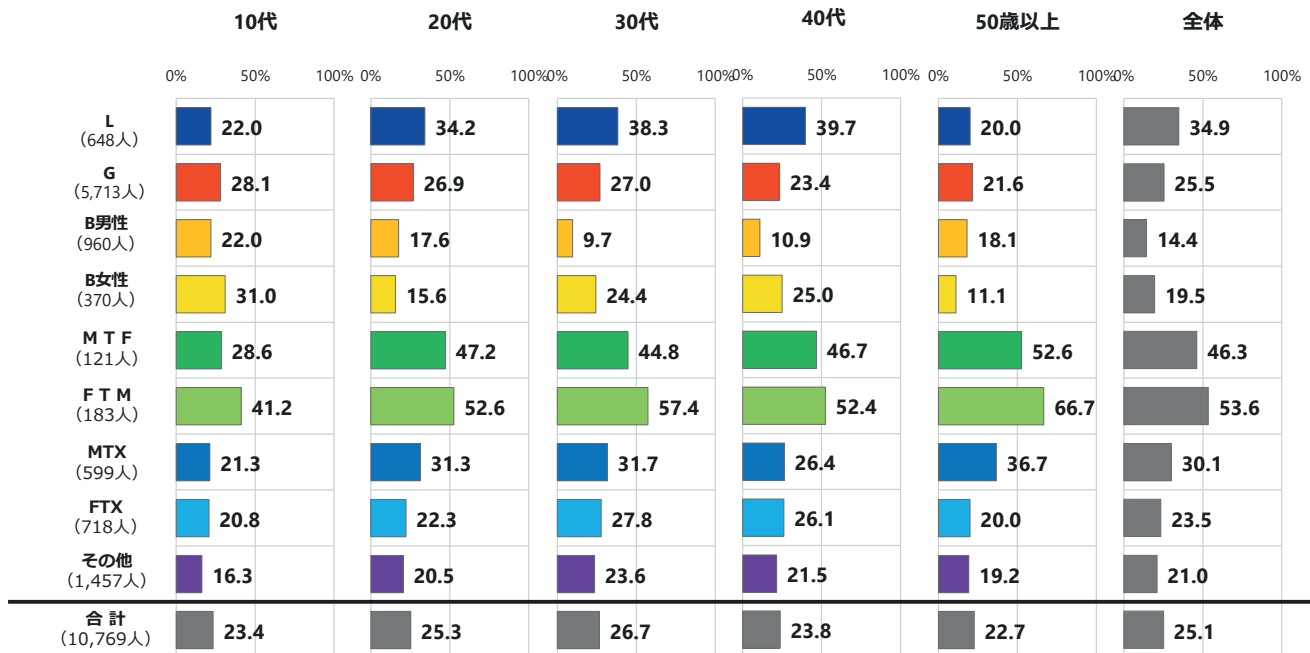
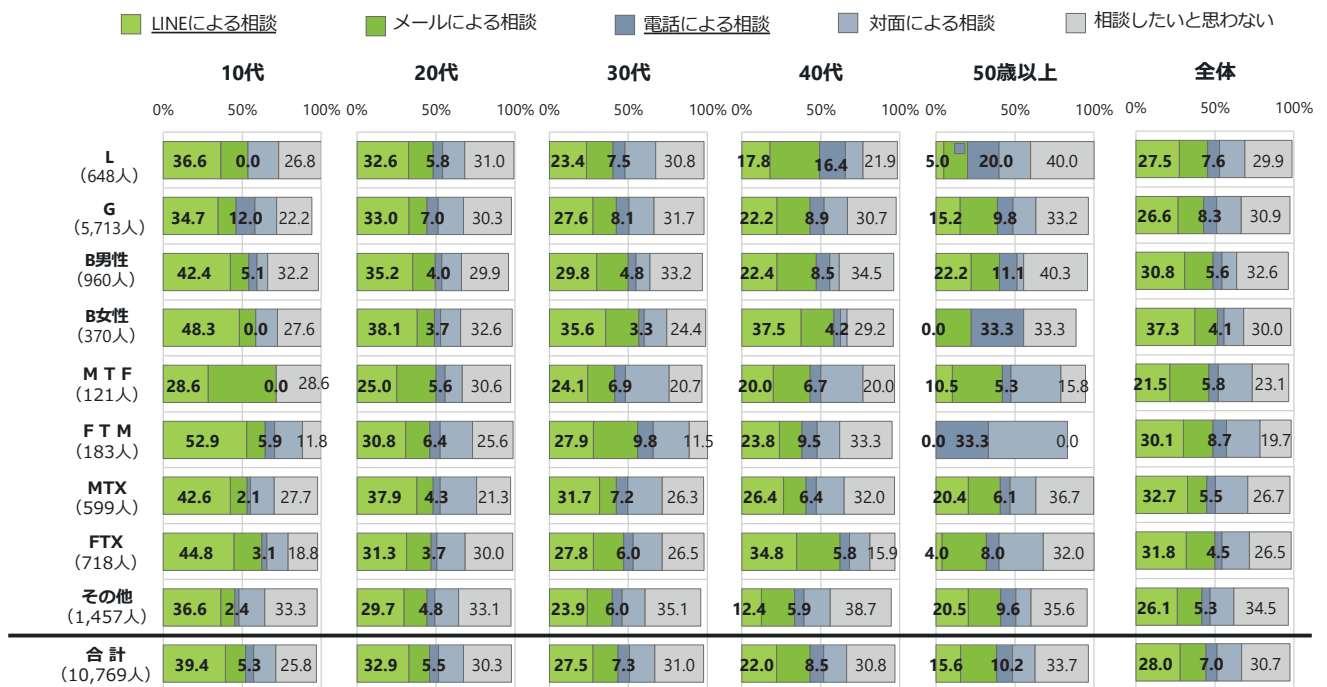


図9 性的指向や性自認に関する相談方法

現在、性的指向と性自認といったセクシュアリティの多様性について行政やNPOなどの民間団体に相談したいと思ったとき、どのような方法があなたにとって最も便利ですか？



ばならない。

性的指向や性自認に関する相談方法

「性的指向と性自認といったセクシュアリティの多様性について、行政やNPOなどの民間団体に相談し

たいと思った時、どのような方法があなたにとって最も便利ですか？」とその利便性を尋ねた。LINEによる相談を求める者が全体では28.0%であったが、年齢階級別（10歳幅）と明らかに有意であり10代（39.4%）、20代（32.9%）、30代（27.5%）、40代（22.0%）、50歳以上（15.6%）であり、年齢が若くなるにつれて

そのニーズがあった。一方で電話による相談を希望する者は年齢が高まるにつれて多くなり、10代（5.3%）、20代（5.5%）、30代（7.3%）、40代（8.5%）、50歳以上（10.2%）であった（前ページ図9）。LGBTsを対象にした国内相談窓口の多くが電話相談であることが多く、同性パートナーシップ制度の導入に合わせ当該自治体がNPO等へ電話相談を委託することもあるだろう。従来の慣例に基づいて電話相談を開設する前に、ターゲットとなる年齢層のニーズに応じた相談手段の提供が可能であるか検討が必要である。

一方で、SNSをはじめとするインターネット空間の活用が目が行きがちだが、古典的な紙媒体による情報発信の有効性が示された好例がある。LGBTs支援を行うあるNPOの活動が自治体の広報紙に載ったところ、高齢の当事者から「初めて自分のことを人に話すのですが……」と問合せがあったという。デジタルディバイドは年齢と関連するため、情報伝達手段や相談窓口はLINEだけしかない、ということになればバランスを欠くことになり、複数の方法を確保することが理想的だ。

おわりに

1999年来継続してきた全国インターネット調査は、欧米諸外国の先行研究が示すサンプリング手法や質問項目等を参考にしつつ、その実施時期の国内時勢に合わせた質問項目を新たに盛り込み、研究参加者の人数を拡大させながら実施してきた。

文部科学省は2015年、2016年、2017年と3年連続発出する文書の中で、教職員の理解が必要であると言及している。厚生労働省は2017年に見直しがされ

た自殺総合対策大綱において、教育分野の取り組みとして「性的マイノリティは、社会や地域の無理解や偏見等の社会的要因によって自殺念慮を抱えることもあることから、性的マイノリティに対する教職員の理解を促進するとともに、学校における適切な教育相談の実施等を促す」としている。これらの文書に呼応して各地の教育委員会や教員の研究団体等は、性的指向と性自認の多様性に関する研修機会を以前よりは格段に積極的に開催するようになってきているが、その質量共に充分であるだろうか。関心のある一部の教育委員会や教員の頑張りに依存するのではなく、全ての教員がLGBTsについて学び学校や地域での取り組みをより加速度的に推進させるためには、教員養成課程の必修科目として盛り込むことや、初任者研修や5年次相当研修、15年次相当研修など自治体によって様々に用意されている現職研修のシステムの中に組み入れることが効果的と思われる。

また、2015年に東京都渋谷区と世田谷区で開始された同性パートナーシップ制度は、2021年5月現在105を超える自治体に拡大されるようになった。制度の導入にあたり性的指向と性自認の多様性を学ぶ職員研修の実施や、教育や医療分野など担当部署ごとにどのような取り組みが実施可能であるか検討を進める自治体が多い。同性パートナーシップ制度は現在、LGBTs施策の象徴であると同時に牽引役を担っているとも言え、今後のさらなる拡大が期待される場所である。全国インターネット調査を通じて、これらのパートナーシップ制度や教育、医療分野での取り組みが当事者へもたらす影響を明確化するには数年の時間を要するであろうが、今後もLGBTsが直面する実態を明らかにする大規模な調査の実施が必要であると思われる。

LGBTsに関わる学校教員のための映像教材

日高庸晴（宝塚大学看護学部教授）監修

LGBTsの子どもの命を守る学校の取組

①危機管理としての授業の必要性（文部科学省選定）

LGBTsに関する授業の実現を目指し、学校としてできることを模索していく一人の教師の姿。取組に抵抗する同僚など実際の学校現場で起こりうる様々な困難も描き、その解決策を考え、問題が起こりつつも一歩前に進めるための多くのヒントを得ることができる。（約38分）

②当事者に寄り添うために～教育現場での落とし穴～（文部科学省特選）

LGBTsの児童生徒のみならず彼らを取り巻く非当事者の児童生徒の存在やその関わりにあたって、教員が留意すべき心得や、学校での取組や授業展開の注意点などを物語仕立てで紹介。教師の不適切な声掛けや授業展開がどのような深刻な事態をもたらす可能性があるか具体的に描く一方、目指すべき理想的な対応の一例も示す。（約38分）

●注文・問合せ先

定価 各巻 19800 円（税込）
（学校・公共図書館向け）

（株）サン・エデュケーショナル
TEL. 03-5428-5675
FAX. 03-5428-5674
<http://www.sun-edu.co.jp>

DVD
全2巻



◎北東北性教育研修セミナー 2021 冬・報告

東日本大震災から 10 年 「災害とジェンダー・セクシュアリティ」 を語る上での前提とは何か

北東北性教育研修セミナー実行委員会共同代表 岡田実穂

東日本大震災からの 10 年。ここまでの時間は、過去にはなっていない。

2011 年 3 月 11 日。東日本大震災の発生は、私たちがこれまでに経験したことのない規模の地震、津波、原発事故を通して、多くの人に不安や恐怖を与え、帰る家を奪い、多くの命を奪った。未だに避難という状況を強いられている人もいる。各所において区画整理、防災対策としての整備などが整いつつある。変わらない日常が訪れているように見えても、その風景は 10 年前に見ていたものとは違う。

そして、原発の問題はいまだに、何一つ解決していない。「メルトダウンはしていない」と繰り返し伝えられていたあの時から。原子炉内にあった核燃料のほぼ全量が溶融しているということが分かり、そして今、廃炉にかかる年数すら明らかでない。

震災と性というテーマは、各所において取り組まれている。阪神・淡路大震災の後、被災地で起きた深刻な DV や性暴力被害をウィメンズネット・こうべが報告。震災から 10 年を契機に「災害と女性」情報ネットワーク⁽¹⁾ が立ち上げられ、当時の状態がまとめられた。東日本大震災においては、2011 年 5 月に、阪神・淡路大震災での記録・経験を生かそうと東日本大震災女性支援ネットワークがジェンダーの視点や障害者、外国籍住民、性的少数派などに配慮した災害支援を浸透させることを目標として活動してきた。

東日本大震災においては比較的早い段階で、女性支援という枠組みにおいての活動が立ち上がっており、特に性暴力被害者支援の文脈では、最速で震災当日に被害の予防と当事者のケアに関する声明を出した性暴

力被害者支援団体も存在する。比較的早期の段階において、LGBTQ の避難所での課題に関しても LGBTQ 当事者団体からの声明も出された。これらは主に、阪神・淡路大震災からの学びを活かすというかたちで活動が始められたものだ。こうした取り組みを後押ししたのは、国内の取り組みだけではない。例えばハリケーンカトリナを契機にまとめられた「災害と性暴力」など、各国の取り組みも重要だ。

こうした活動は、災害弱者としての「女性たち」を可視化することから、その弱者性・脆弱性が発生してきた社会構造に対しても切り込んでいる。そこにいる女性たちが、有事に不利益を被ることがないように注意を促すと共に、重要とされたことは、災害行政や避難所の運営等への女性の参画というところではないかと思う。そして、その中で「女性」という枠組みを見つめ直し、より広範にジェンダー・セクシュアリティを捉えていくこともされてきた。

災害時の脆弱性という意味では、身体・知的・精神的に障害を持つ人たちであったり、シングルペアレントたち、子ども、疾患を持つ人たち、DV/IPV などの最中にいる人たち、外国籍の人たち、日本語を主たる言語として使わない人たち、それぞれに災害に関する課題があるということも理解されてきたように思う。一つの課題から、より広範な課題をフォローするための議論が生まれていくことがもちろん望まれる。

しかし、いざ災害などが発生すると、「まずはここから」と、社会的にマジョリティとされる世帯主義や健常者至上主義、性別二元論での配置がされ、個別性が蔑ろにされてしまうのもまた現実だ。特に、性に関わる課題がいつも後回しにされてしまいがちだ。性に関わる課題を有すること、そこについてはいつも「特

別な配慮を有するもの」として、後付けにされてしまう。果たしてそうなのだろうか。あらゆる人たちが、あらゆる個性の中にある課題を有し、それでもそれぞれのニーズを主張し必要な援助を有事の際に受けることは、当然の権利であり、社会にはそうしたことに応える義務がある。

ジェンダー・セクシュアリティに関する課題は、常に法的支援の狭間となってしまうリスクに晒されている。今回、LGBTIQ の視点から「災害とジェンダー・セクシュアリティ」をテーマとしたのは、そうした不可視とされがちな課題に対し、社会課題としての顔をつけていく作業をしたいと思ったからだ。

広く全ての人にもたらされるべき性教育というものを考える時にも、マジョリティのみに焦点を当てた話題提供には限界がある。より脆弱で、差別や偏見に晒されやすく、教育や情報を得る機会の損失を被るのは、主にマイノリティたちであるからだ。マイノリティの課題を見つめていくことは、より多くの個性に向き合い、それぞれにとって有用な教育や、社会基盤を作ることになると信じている。

ここまで、多く「脆弱性」という言葉を使ってきた。事実、この社会で生きる上でマイノリティには脆弱性が付与されている。しかし、脆弱性を作っているのは、マイノリティそのものの持つ個性ではなく、社会の側の規範意識となっている。様々な場面で「規範」はマジョリティを保護するために役立てられているが、実はマジョリティという存在がいつどこでマイノリティと認識されるかというのは、曖昧なものである。

それこそ、前段でも例示したように、LGBTIQ の人々、シングルペアレント、障害を持つ人、外国語を使う人…等、「マジョリティではない」とされる人たちを羅列していくと、社会のかなりの範囲をカバーする人口層となるという側面もある。そうした人たちは「脆弱」「特別な配慮を必要とする人」としてしまうのは、実はとても横暴なことだ。

「脆弱」という視点で語られることの多い災害についてのエトセトラを、どのようにして当事者主体の災害時対応に変革していけるのか。参加者の方々に持ち帰っていただきたい重要な点として考えていたのは、災害とジェンダー・セクシュアリティを考えるうえで、LGBTIQ の人たちが単なる「災害弱者」や「要配慮者」でなく、レジリエンスを持つ人たち、あるいは、

防災や地域づくりの主体であることを明確にすることだ。それはLGBTIQ のみならず、どのような人たちも同じこと。個性を持つ課題は、後付けに書くようなことではない。多様な社会の構成員として、様々な課題を包摂する災害対策が必要になっている。

東北地方の性的マイノリティ団体活動調査

本年3月28日開催の本セミナーでは、杉浦郁子さん（社会学／和光大学教授）、前川直哉さん（社会学／福島大学特任准教授）から、共同研究として実施された「東北地方の性的マイノリティ団体活動調査」についてのご報告をいただき、山下梓さん（岩手レインボーネットワーク／弘前大学助教）から岩手を中心とした震災発生直後からこれまでの歩みを紹介いただいた。

「東北地方の性的マイノリティ団体活動調査」には東北地方の性的マイノリティ団体（19団体）に関わる23名へのインタビューが丁寧にとられ、その中には団体設立の経緯やそれぞれの地域での活動、東日本大震災を軸とした経験や振り返りなども聞き取られている。報告書はA4版360ページにも及び、とても読み応えがある。東北各県の図書館や男女共生センターに寄贈され、インタビューの一部はweb⁽²⁾で見ることができるのでぜひご覧いただきたい。

前川さんからは調査についての説明から、各インタビューを受けた人たちの話を一部紹介しながら、東北という地域に生きる上でLGBTQ当事者が思う地元への感覚や地元で活動する上でのバリアとなる地域社会のありよう、それぞれにとっての「東北」など、居住地やSOGI（性的指向・性自認）、社会的な地位なども含めた複合的な状態により異なりつつ確かにそこにいる当事者の声が報告された。

その中では、自分に必要なものは何か、もしくは必要としていないのかを含めて、災害を通してそれぞれが明確に思考している様子が見てとれた。総じて、東北という地域を一括りに見ることや、脆弱な地域として上から押し付けるような支援のあり方では当事者たちを困惑させ、力を奪うことに繋がるということが示された。この点については、杉浦さんからのお話の中でも話されていたように思う。

杉浦さんからは、特にクローゼット再考、可視化を前提しない活動という2つの軸に、当事者たちの語り

を元にお話をいただいた。「カミングアウト／クローゼット」「都会／田舎」などの二項対立における語りによって当事者の多様なありようが不可視化されてしまうということ。コミュニティの全体像を見ていくためにはそこから距離を取ることが重要だということであったと思う。

しかし一方、報告でもあったが東北にはたくさんの可視化のための活動もある。パレードや居場所作り、政策提言、同性パートナーの法的保証を求めた行動、選挙への立候補、そこにそれぞれの場で立ち上がってきた人たちがいる。オープンであったり、クローゼットであったり、そうした人たちが不可視とされるでもなく、それぞれの場を求めてきた。

シメとして杉浦さんは、カミングアウトをしてもなくても当事者のニーズや課題を可視化することは可能だということを言われたが、その点については、東北に生きる一当事者として、カミングアウトをした人間としては、若干の削がれる思いがしたのも否めない。私自身は、「どちらもいるから可能だ」と思っている。それはそれぞれにとってもパワフルなもので、どちらが優れているという話ではなく、どちらも必要とされる中で、それぞれの役割を持ち、生み出されてきた。そのことに敬意を払う社会であってほしいと思う。

山下さんからは2011年から今日までの岩手での取り組みについて話していただいた。まず山下さんには、この10年、実直（という言葉が、彼女を示すにはピッタリだと感じている）に活動をしてこられたことに感謝をしたい。そして、報告をされる上で、出会ってきた人たちが経験を一つひとつ思い浮かべながら話しているのだろう様子を、胸の痛む思いがした。震災直後に団体を立ち上げて以降、長期的なスパンでLGBTQ当事者たちを含めた居場所を作ることや、各国の人々との出会い、女性支援の流れと合流しての政策提言、「にじいろ防災ガイド」の作成など、この10年を岩手で過ごしてきたことについて、そこにいる人たちと共にあった時間を25分という短い時間で語ることは大変なことであったと思う。企画者として、より丁寧な運営のあり方ということを考える機会もいただいた。

岩手レインボーネットワークで制作された「にじいろ防災ガイド」は当該団体のブログからダウンロードできる⁽³⁾。最後に山下さんは、（女性の視点を含む）ジェンダー視点から様々な活動をしていくことや、にじいろ防災ネットワーク構想、性暴力について、他にも東北という地域にこだわった活動を、次の10年に向けて語っておられた。

おわりに

講師の3名の方を通じて、自らが経験してきたことを「語る」ということについての課題を強く感じる機会となった。一般化してしまうことは簡単なことだが、そうすることによって、そこにいる生身の人たちが見えづらくなってしまう。

一般化は不可視化を呼び、社会に「慣れ」を生じさせてしまう。これは重要な教育における課題の一つでもある。「簡単に言うと」と言うことを私たちはとても簡単に言ってしまう。しかし、その簡単を形作るものは、実に複雑なものである。複雑さを、複雑なものとして語っていくことの大切さを伝えていきたい。

今回、COVID-19の影響を受けて、再度オンラインでの開催となった。地域ということに拘るという意味では、我々も北東北と言う地域にこだわった活動を継続したいという思いがある。今回は全国からの参加を有料に、そして北東北からの参加を無料にと言う区別をさせていただき、結果として参加者50名のうち、ほぼ半数が北東北からの参加となった。まだ当面は継続するであろうオンライン開催に際し、各地域ごとの課題に当事者性を持って取り組むためにも、いい一歩となったのではないと思う。

運営としての反省も多くあるが、今回、東日本大震災から10年という節目にこうした企画で皆さんと一緒にできたことを心から感謝している。東日本大震災から10年。東北から学ぶということを行っている間にも、次々に新たな災害が発生している。私たちの生きる社会は、これまでの多くの犠牲や経験、そして学びを十分に活かしているのか、改めて今、心して考えなければいけないと感じるセミナーとなった。

(1) <https://wn-kobe.or.jp/bosai/index.html>

(2) <http://www.reddy.e.u-tokyo.ac.jp/>

(3) <https://ameblo.jp/iwaterainbownetwork/entry-12157544694.html>



いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ②

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

ねじれた思い

今回は、もう少しわたし自身のことについて書こうと思います。とは言え、実はライフストーリーについては『現代性教育研究ジャーナル』のNo.1からNo.36まで『『ありのままのわたしを生きる』ために』というタイトルで連載をさせていただき、それを加筆修正したものを「性教育ハンドブック vol.6」で一冊の冊子にまとめさせていただきました。詳しくはそちらをお読みいただければと思います。今号では、あの時あまり書かなかったことについて、少し述べることにします。

わたしは1960年代前半に生まれました。出生時に割り当てられた性別は「男」でした。ただ、小さい頃から女性のかっこうをしたい、あるいは女性の身体を獲得したいという思いはありました。一方、性的指向は女性に向いているため、「女性が好きな自分は男性だ」とも思っていました。男性であるにもかかわらず、女装をしたかったり女性の身体を獲得したいという自分をあらわす言葉を、当時のわたしは知りませんでした。唯一あったのは、「変態」という言葉でした。そんな自分のことは、世界の誰にも言うまいと決めていました。ただ、「言わない」ことを実践するのは、そうむずかしいことではありませんでした。なぜなら「変態」としての自分の側面を忘れてしまえばいいからです。忘れてしまうと、そこにはあたりまえの日常がありました。このようにして、自分の思いを誰にも言わず、小学校・中学校・高校・大学時代を過ごしました。

やがて教員になり、本格的に人権教育にとりくむようになりました。ヤンチャな生徒とかかわる毎日はとてもスリリングでした。また、部落の生徒や在日コリアンの生徒とのかかわりは新たな発見に満ちていました。そんな中で、わたしは自分の「変態」の側面を忘れて日常生活を送っていました。

ただ、ふとした瞬間に、その「変態」の側面を思い出すことができました。それは例えば、フェミニズムに触れた時でした。人権教育に携わっている限り、もちろんこの社会が女性に対していかに抑圧的であるかということは承知していました。そして、自分自身

が「男」である限り「抑圧する側」であることもわかっていました。しかし一方で「あなた方は、わたしがなによりもほしい『女性の身体』を持っているではないか」という、あこがれを乗り越えた、なかば憎悪ともいべき気持ちが自分の中にありました。あるいは、部落の人や在日コリアンの講演を聞いた時でした。「好きで部落に生まれたわけではない」「好きで朝鮮人に生まれたわけではない」といったフレーズを聞いた瞬間「自分も好きで男に生まれたわけじゃない」と思いました。やがてわたしは、そのような講演を聞いた時、どこかで自分の「しんどさ」と比較してしまうようになりました。とは言え、もちろんわたしは差別を受けていたわけではありません。差別を受けていないわたしは、「しんどさ」は抱えているものの「被差別当事者」なわけではありません。すると、頭ではその人の痛みに共感し差別の現実への怒りを持ちながらも、「あなたの話は人権課題。自分も学校でとりくみをしている。それに対してわたしのことは『変態』の話。人権でもなんでもない。あなたは確かにしんどいかもしれない。でも、わたしの話はしんどいだけじゃなくて、恥ずかしい話。あなたの方がマシでしょう」と、心のどこかで考えるようになっていきました。しかしながら、そういう自分の気持ちを表に出すことはできませんでした。なぜなら「なぜそう思うの?」という問いへの答は「変態だから」しかなかったからです。このような「ねじれた思い」を持つわたしは、頭では「人の痛みに共感しなければならない」と考え、そのように振る舞いながらも、心の奥底では人の痛みに共感できない、冷たい人間になっていったように思います。

しかし、当時のわたしはこうした自分の冷たさに気づいていませんでした。なぜなら、日常生活の中では忘れていたからです。それどころか、部落出身や在日コリアンの生徒が、教室の中でクラスメイトに向かって自らのことを語る場面に立ち会えたのはこの頃でした。次号では、そんなわたしにやってきた転機とそれ以降について書こうと思います。

多様な性 のゆくえ

One side/No side [49]

大観衆はどこにいる

「東京 2020 大会」と総称される東京オリンピック・パラリンピックの開催は、近づいているのか、遠のいてしまったのか。はっきりしないなかで原稿を書いている。おそらく掲載時点では決定しているだろうが、それはそれとして、ここでは2つのレガシーについて書きたい。

開催されるにせよ、されないにせよ、レガシーはすでに生まれている。

その1つは常設の大型総合LGBTQセンター『プライドハウス東京レガシー』が2020年10月11日、東京・新宿にオープンしたことだ（欄外アドレス参照）。

『プライドハウス』については2019年のラグビーW杯開催時にも紹介したことがある。セクシャルマイノリティの人たちが安心して過ごせる居場所と性的指向や性自認に関する情報発信のため、巨大スポーツ大会に合わせ地元開設される施設である。ラグビーW杯では『プライドハウス東京2019』がオープンした。試行的な側面もあったが、収穫は大きく、オリンピック・パラリンピックへの期待も膨らんだ。

ところが、いよいよ本番という時になって、肝心の「東京 2020 大会」が1年延期になってしまった。プライドハウス東京はどうするのかと思っていたら、なんと大会の開催を待たずに、『組織委員会による公認プログラム』として、本来なら大会後に常設を目指していたレガシーの方が先に誕生した。

この柔軟性と決断力、そこには球技などで、ゲームの流れを変える見事な中盤の組み立てを観る時のようなサプライズと爽快感がある。観衆の一人として、私などはひそかに唸ってしまった。

さらに、今年2月、組織委員会の森喜朗会長（当時）が女性に関し不適切な発言を行った際には、レガシーの運営主体であるプライドハウス東京コンソーシアムとして『性別および性的指向、性自認等に関する差別的な発言や行動が起こらないためにどのような方針を立てているか』、『実際に起こってしまった際に具体的にどのように対応する計画なのか』の2点につい

て組織委に公開質問状を出している。こうした行動も現在進行形の遺産というべきだろう。

もう1つは私の個人的な願望としての未完のレガシーでもあるのだが、「東京 2020 大会」はぜひ無観客開催にチャレンジしてほしい。もちろん、新型コロナウイルス感染症の流行の中で開催の可否を判断しなければならないという事情はある。

ただし、ここではもう一步踏み込んで五輪の歴史を振り返り、これからを展望したときの必然の選択として無観客開催をとらえてみたい。

1896年のアテネ大会を出発点とする近代五輪の最初の支え手は貴族だった。その支え手が国家に代わるのは40年後の1936年ベルリン大会あたりだろう。国家主導の大会運営は大規模化を可能にしたが、政治に翻弄されやすくもある。1980年モスクワ大会で限界に達し、ベルリンから48年後の1984年ロサンゼルス大会で商業五輪の時代が幕を開けた。

国家主導にしても商業五輪にしても、そのパワーの源はスタンドを埋め尽くす大観衆とメディアだった。

だが、6万、7万という大観衆はスポーツ観戦に適したものだろうか。正直なところ選手の細かい動きは客席から確認できない。観衆は結局、会場に特設された巨大スクリーンの映像を追うことになる。

そもそも東京大会はコンパクトな運営を約束して開催権を得た経緯がある。コロナの試練で無観客の中継技術も進化した。会場を人で埋め尽くさなくても臨場感は得られそう。 「観る」に焦点を当てれば、一極集中から分散型への道を探り、中継による一体感を共有した方がむしろ気が利いている。トイレの行列や行き帰りの交通機関の混雑だって回避できるのではない。巨大会場のリスクは感染症に限った話ではない。日本の観客だけ入れるといったちまちまとしたことは言わず、安全性と経済効果のバランスを踏まえ、無観客開催の収益性を見極めてこそ、1936年ベルリン、1984年ロスに次いで2021年東京が危機の五輪に第三の転機を切り開くレガシーになるというべきだろう。

〔愛知県名古屋市立緑高等学校〕(下)

性暴力の加害者も被害者も生まない教育

名古屋市で養護教諭をつとめる越地涼子教諭の前任校（平成31年3月まで在籍）名古屋市立緑高等学校では、「性的同意」の学びを深めるために外部講師による講話後、保健部と学年会の共催で振り返りの授業を実施した。生徒たちの反応を交えて授業の様子を紹介する。

加害者、被害者の気持ちを想像してみる

思春期セミナーの振り返りの授業は、総合的な学習の時間を使って講演会の翌週、体育館に1年生9クラスが集まって行われた。

T・Tで授業を担当するのは、保健部の英語科教諭と越地涼子養護教諭である。専門的な講話部分を養護教諭が受け持ち、導入部分やグループワークは英語科教諭が担当。各クラスの担任教諭は、グループを見回って声をかけるなどしてサポートにまわった。

授業の導入部分が終わり、いよいよ本題へ入ると、越地養護教諭は、デートレイプの教材である「ジムとジェーンのエピソード」を読み上げた。

ジェーンは憧れのジムとデートをするのだが、デートレイプの被害にあってしまうというストーリーだ。

越地養護教諭は、このストーリーでは、男性＝加害者、女性＝被害者という設定だが、性暴力は実際は男女逆の場合や同性間でも起こり得ることをまず生徒たちに伝えた。

ストーリーを読み上げた後は、各クラスごと、男女別に6～7人のグループをつくり、登場人物の気持ちを想像して発表してもらった。

「同性のグループなので似た意見が出やすく、わきあいあいと意見を出し合っていました」と越地養護教諭は話す。とくに男子生徒のグループは、最初は照れつつも次第に声が大きくなって盛り上がっていたという。

「当たり前」は男女間で違っていた！

次に、男女混合の6～7人のグループに分かれて、1回目のグループワークで出し合った意見を共有した。

愛知県名古屋市立緑高等学校
校長 野中 均
生徒数 982名
教員数 63名（嘱託5名）

（2021年3月現在）

【ジェーンとジムのエピソード】(要約)

ジェーン（20歳・女性）は、以前から憧れていた人気者のジム（21歳・男性）に誘われ野球観戦に行った。～中略～試合後、ジェーンはジムの家に行くことになった。食事後、ジムがジェーンにキスをした。ジェーンがロマンチックな気分を楽しんでいると、今度はジムが体を触り始めた。ジェーンは嫌だったので「気分が悪い」と言っただが、ジムは「セックスをしたら気分がよくなるさ」と言ってやめようとしなかった。

ついにジェーンが「やめて」と言うと、ジムは怒り「一緒にビールを飲み、家に来るのを同意し、ロマンチックなセッティングをして！日さんざん誘いをかけておいて、今さらやめるとは、自分を何様と思っているんだ！」といった。さらに、ジェーンは演技だと思い、強引にセックスをした。

『デートレイプってなに？—知りあいからの性的暴力』（大月書店 アンドレア・パロット著、村瀬幸浩監修、富永星訳より。一部改変）

男子生徒から「ジムはセックスしてよかったのは当然」という意見が出たり、女子生徒から「キスしなかったのにジムはひどい」などの意見が出るようになると「えー、ほんとうに、そうなの？」と互いの意見の違いに驚いている様子だったという。

「これまでの思春期セミナーは、生徒たちにとって遠い未来の話だったようだが、今回は、グループワークが盛り上がり、自分たちの身近にある問題としてとらえていた」と越地養護教諭は話す。

	男子のグループより	女子のグループより
ジムの気持ち	・そういう雰囲気じゃん。 ・家で2人になったら、やっきやない！ ・「生理だから」とか言って、うまく断ってくれ。	・途中まではいい雰囲気だったのに、なんで「やめて」って言われたんだろう。 ・俺はからかわれているんだろうか？
ジェーンの気持ち	・気持ち悪い。 ・乗り気じゃなかった。 ・いっしょにいただけでよかったのに。	・ジムは好きだけど、心の準備が……。 ・もっと私を大切にしてほしい。 ・妊娠していないか心配。

お互いに好意を抱いているように思われたのに、何があったのか。ストーリーでは明かされなかったジェーンの本心を生徒たちに伝える。

【ジェーンの本心】

- ・飲んで騒ぐジムの友人に文句を言わなかったのは、ジムを喜ばせたかったから。
- ・本当は外食をしたかったのに、厚かましいと思われるのが嫌で家でいいといった。
- ・デートはうれしかったが、セックスまでしてよいとは思わなかった。

越地養護教諭は、2人には言葉による合意の確認が足りなかったこと、どちらか一方の意思だけで行われた性行為は、それまでの雰囲気に関わらず残念ながらレイプになること、恋人など一定の関係性のある知り合いから受けるレイプをデートレイプということをし、生徒たちに伝えた。

【加害者を生まないために——性的同意に関する注意事項】

- ・まず互いに心をオープンにして話し合う。
- ・（セックスをしたいと思ったときは）毎回、同意の確認が必要である。
- ・（加害者にならないためには）相手からどのような返事が来ても、受け入れる覚悟が必要だ。
- ・いったん相手の同意を得られたあとでも、途中でやめたいという申し出があれば、中断しなければならない。
- ・相手が1つの行為（たとえばキス）に同意しても、ほかの行為（たとえばセックス）に同意しているかどうかは確認が必要である。
- ・暴力や「セックスしなければ別れる」といった心理的支配、また相手が泥酔状態などで自由に意思を伝えることができない状態で得られた同意は無効である。

相手の意思を尊重する

「性的同意」をイメージしやすいように、最後にイギリスのテムズバレー警察署が作成した動画「Consent it's simple as tea」を生徒たちと一緒に鑑賞した。

2分足らずの動画だが「性行為における同意」を

「紅茶をすすめること」に例えて、同意がすべてであることをわかりやすく伝えている。海外各国でも性教育に使われており、YouTubeでみることができる。授業でも扱いやすい教材だと越地養護教諭は話す。

相手の同意がないまま無理やり相手に紅茶を飲ませ、紅茶が口からこぼれてしまうシーンでは、飲み物を強要することの滑稽さに生徒たちから笑いが起こる。

「でも、これが性行為だったとしたらどうでしょうか」——越地養護教諭がこんな質問を投げかけると、先ほどまで「ジムの考え方は男なら普通」と盛り上がっていた子たちも静まり返る。

最後に、はっきりした同意の確認がない性行為はすべてレイプになる可能性があることを、再度生徒たちに伝えた。

上から目線にならない授業を

越地養護教諭は「ここまで性的同意の授業の紹介をしてきましたが、実は4年ほど前までは私も『性的同意』という概念について知りませんでした」と明かす。

今回デートレイプの教材にした『デートレイプってなに？——知りあいからの性的暴力』（大月書店 アンソレア・パロット著、村瀬幸浩監修、富永星訳）という本に出合って、性的同意の授業につながったという。

初めての試みで反省点も少なからずある。

「『部屋まで来たのだから、セックスできると思ったジムの考えは普通！』といった子たちには、『正直に伝えてくれてありがとう』という言葉をかければよかった。今後は、私自身、最近まで性的同意という概念を知らなかったことをオープンに話そうと思います」。

工夫の余地はいろいろある。越地養護教諭は「試行錯誤しながら、今後も自分とパートナーが性暴力の被害者にも加害者にならないよう、言葉による性的同意の大切さをしっかりと伝えていきたい」と話す。

※本授業実践に関する問合せ等は、名古屋市立桜台高等学校・越地涼子養護教諭まで。

（取材・文 エム・シー・プレス 中出三重）

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

「課題主義」性教育のすすめ

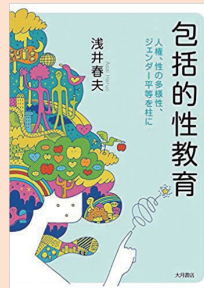
本紙『現代性教育研究ジャーナル』(No.121)の特別座談会「これからの性教育・性科学を考える」で、話題の一つになっていたのが「包括的性教育」である。どのような内容の性教育なのか理解しているつもりだが、実はかなり怪しい。そこで、自分の理解の程度を確認するために手にしたのが本書である。

著者は、2018年に刊行された『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の翻訳者の一人である。本書の冒頭(はじめに)で「これからの性教育の本流は包括的性教育であることに確信を持って、研究と実践に向かっていくよう呼びかけるものです。」と宣言している。そして、包括的性教育とは何かについて、そのポイントを次のように述べている。

- ①乳幼児期から思春期、さらには成人期、高齢期まで、人生におけるさまざまな課題に向き合っているすべての人にとって学ぶ意義があること。
 - ②性的発達と人生の歩みにおけるあらゆる局面に、賢明な選択と対応ができ、自らと他者の尊厳を大切にできる知識・態度・スキルをはぐくむこと。
 - ③人間関係においてさまざまな共生能力を獲得し、喜びを共有できる能力を獲得していくこと。
- この3つが大きな柱であるという。

第Ⅰ部が「包括的性教育とは何か」、第Ⅱ部は「包括的性教育をすすめる」。

第Ⅰ部の第1章で『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の初版から改訂版の内容の進化と変化を解説。ガイダンスが性教育の国際的スタンダードになる内容であることを分かりやすく説いている。第2章は「性教育におけるテーマ主義と課題主義」と題し、テーマ主義と課題主義の違いを述べている。包括的性教育を知るうえで、重要であると思われるので引用する。



包括的性教育 ——人権、性の多様性、 ジェンダー平等を柱に

浅井春夫著
大月書店
定価 2200 円(税込)

『「テーマ主義」とは、性教育カリキュラムを構想し実践する際に、テーマ(生命誕生、月経、射精、避妊、中絶、感染症予防など)を学年別に配列することを基本的作業として、それぞれの学年の授業でどのようなテーマを取り上げるかが性教育実践の軸となっている考え方のことです。(中略)

それに対して「課題主義」とは、性教育カリキュラムを構想し実践する際に、課題(現代社会が直面する性に関する問題、解決したい問題、重視したい子どもの性的発達上の問題など)は何かを検討し、子どもや社会の現実に即して、何をどのような授業で取り上げるかを子どもの発達要求やニーズと現場実践者・保護者の要望を踏まえた性教育実践をすすめる考え方のことです。国際的なスタンダードの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」などは基本的にこの立場にあるといえます。』

文中では、図表にして「テーマ主義」と「課題主義」を比較し、その違いを示している。

第Ⅰ部の最終章である第3章では、戦後日本の性教育政策を概観し、第Ⅱ部の包括的性教育の実践の具体的なあり方・方法に繋げている。第Ⅱ部の章立ては、第4章が「幼児期に包括的性教育をすすめる」、第5章「学校教育の現場で包括的性教育をすすめる」、第6章「包括的性教育の立場で『性教育の手引』を発展させる」、最終章の7章「性教育をすすめるとき、そして立ち止まるとき」という構成。

著者は、「包括的」という意味は「広域かつ深い学習」という意味も含んでいると述べ、また、「実践のゆらぎ」が創造性の原動力になるとも言う。「ゆらぐちから」ではなく、「ゆらぐことができるちから」であると強調する。本書の基本スタンスは、これまでの学校教育での性教育に批判的であるが、その理由を丁寧に分析し、わかりやすく述べている。

(教育ジャーナリスト 日向野一生)



性を扱うためのアティチュード講座



オンラインワークショップ（全5回）

対人援助の仕事をしている方や、性教育など性に関する活動をしている方を主な対象とした講座が開催されます。性の話題を扱ううえで身につけておきたい態度について学びます。

日 時：2021年6月5日（土）、12日（土）、19日（土）、7月3日（土）、10日（土） 20:00～21:30

開催方法：Zoom を利用したオンライン開催

内 容：性を扱うアティチュード（態度）、多様性理解、セックスは誰のもの？、性の話伝え方など

受講料：5,000円（全5回分の総額）

主 催：性の健康イニシアティブ

詳しくは <https://sexualhealth.jp/archives/661>



主催 SEE性教育アカデミー
協賛 日本性教育協会（JASE）

SEE性教育アカデミー2021 Webinar

Attitudes Toward Sexuality Education and Values in Sexuality Education

世界の〈学校〉性教育

それぞれの国における現状と課題・乗り越え方

1ヶ月間見放題 3000円
全編（80分）日本語字幕つき



サンプル動画
無料配信中



SEE
ホームページ

性教育を特集した報道・記事が急増しています。「おうち性教育」という言葉とともに聞こえてくるのは、「日本は性教育後進国」「肝心なところはAV任せ」「学校教育には期待できない」といった批判の声。では、諸外国の現状はどうなっているのでしょうか？
インタビュー形式で録画編集した動画6本と特別編1本で構成されています（80分）。ゲストは、ユネスコ編『国際性教育テクニカルガイダンス』の策定メンバーや、「セクシュアル・プレジャー」概念を定義したGABの諮問委員、性に関わる専門職認定の必須要件とされるSAR（性に対する価値や態度の自己再評価）研修の指導者など、性教育の経験豊かな6名。各国の現状と課題に加えて、性教育の価値、性教育に対する態度、実践家の研修プログラムなどの話題、さらには〈性の健康〉と〈性の権利〉をつなぐ…重要なのに、忘れ去られてきた…リンク〈セクシュアル・プレジャー〉についての解説もあります。日本語字幕つきで、1か月見放題。

★ゲスト・スピーカー

Dr. Charlotta Löfgren-Mårtenson（スウェーデン／マルメ大学教授／社会福祉・性科学）

「最近、大きく変化した学校性教育のありようとその理由」

Dr. Tommi Paalanen（フィンランド／セクスボ財団代表／哲学・性科学）

「研修は(800時間以上の性教育実習を含め)1年間」

Dr. Sara Nasserzadeh（米国／AASECT認定セックス・セラピスト／社会心理学）

「専門職の認定にはSARの受講が必須条件」

Dr. Jacqui Hendriks（オーストラリア／カーティン大学講師／性科学）

「性科学で修士号・博士号が取得できる大学における教育」

Dr. Wenli Liu（刘文利）（中国／北京師範大学教授／性教育）

「中国における包括的セクシュアリティ教育の推進」

Antón Castellanos Usigli（国際的組織GAB諮問委員／公衆衛生学）

「セクシュアル・プレジャーは性の健康と権利をつなぐリンク」

★動画（Webinar）の視聴方法

- ①お名前、②ご所属、③連絡先を事務局（kansaishy@gmail.com）まで
- 事務局から連絡の口座に視聴料3000円を振込（Paypalもご利用可）
（複数で視聴される場合は、人数分の振込みが必要）
- 入金確認後、動画視聴用のURLを通知

1ヶ月間、繰り返し視聴できる。

すぐ授業に使える

性教育実践資料集 中学校改訂版

〈主な内容〉

- 第1章 中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）
- 第2章 性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）
- 第3章 指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／8つの1年生の指導事例／6つの2年生の指導事例／6つの3年生の指導事例／7つの個別指導事例／5つの組織の指導事例）
- 第4章 参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

すぐ授業に使える

性教育 実践資料集 中学校改訂版



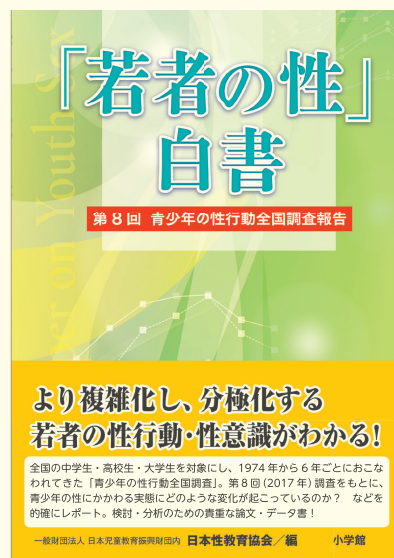
定価 2,200 円（税込） B5 判・224 ページ

「若者の性」白書

第8回 青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

- 序章 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
- 第2章 青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
- 第3章 家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
- 第4章 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
- 第5章 青少年の性行動と所属集団の性行動規範
- 第6章 青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
- 第7章 性的被害と親密性からの／への逃避
- 第8章 青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～



定価 2,420 円（税込） A5 判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！